

方向

第二二二号 一九九〇年一〇月三十一日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

歌人・大塚五朗 (一一一)

100101 原田憲雄

秋 去 冬 来

一九三〇年 五郎、三十三歳。京都府立京都第三中学校教諭。

春の比叡

四月四日森永義一氏と比叡アルプスを越えて四明嶽に登る。諸木の花盛りなり。

遠く見れば新芽かと思ふ榛の樹の房なす花はゆれて匂へる

白真弓春の山風ふくなべに榛の穂花のにはふ明るさ

馬酔木の花咲きて匂へり片照りの山の道べにわれは疲れぬ

かたまりて深山桜の咲くが見ゆ春のかすみのまぶしき方に

まなかひに山はつづけり春の日の天がすむこそ寂しかりけれ (山原 二九一三)

雨後の山

四月十一日岩見護氏と竜安寺山より御室に遊ぶ。

陽のありと見えて静けき曇り日の深山つつちは咲きのほのけさ

水濱き伏す岸の桜のあはれかもありのままなる花つけにけり (竜安寺の池)

あたたかく松雀(まつめ)来て鳴くみささぎの松のほぬれは花さきにけり

松の花うつうつにほふみささぎの尾の上の空は雨をふくめり

自ら花は実となるあはれさや四月の小野に風のあふるる (山原 二二二三四)

五月野

青蛙ほがらに鳴けり五月野の草野かなしききんぼうげの花

真陽すみて天伝ふこそかなしけれ雨のあとなるきんぼうげの花

野に生まれし風の青さよ道くまの槐の花はこぼれたるかも

ほろほろと槐の花のこぼるるや五月半の空晴れにけり

道くまに花をこぼして一本の槐は空に耀きにけり (山原 二二二二七)

山 峽

昭和五年五月十日生徒をひきつれて鞍馬貴船に遊ぶ。谷は五月の光みちたり。

陽の光ここにとどかず山峽はつめたくしやがの花さきにけり

ひえびえと岸に咲きつくしやがの花谷川の瀬はしぶきあげたる

しぶきなす川の瀬風に打ちなびき大黃の葉はみな濡れにけり

峽間ふかく入りつつ仰ぐ天つ陽の青山の秀にあるがかなしき (山原 二二二二〇)

高尾嶺

五月三十一日夕方より六月一日にかけて同僚と共に高尾山に遊ぶ。若葉を賞せんとなり。

この谷ゆただにそばだつ青山の山の秀にして陽はてりにけり

山あひに日輪見ゆるあはれさよ谷川の瀬をわが渡りけり

細々と谷に下れる山道のここよりも見えて人の通へる

あからひく昼にはあれど谷を深みなける河鹿の天ひびきたり

われ腹痛はげしく困じゐたりしにその家の老婆われに薬をくれつ。

のめといひてくれし薬をわがのみて淋しくは聞く谷の河鹿を

てのひらに赤き薬をもみながら現身われは河鹿を聞くも

この谷をかこみて高き青山のさびしくも今は朝あけにけり (山原 一三〇、一三二)

比良越

八月十四日、十五日にかけて森永義一氏と共に大原の奥より比良が嶺を越ゆ。

家毎に乾せる麻草(をぐさ)野ほろにがさにほひて長し麓への道(途上二首)

道ゆたゞにそばたつ山の照りかげり雲のあはたゞしき真昼なるかも

比良が嶺に夕ゐる雲のあはたゞし今宵はいねて明日かこえなん(山麓坊村に泊る)

深谿の八谷はもちて比良の山いざよふ雲に夕べかくれぬ

疲れたる足うちのべて現なし蚊帳に来て鳴く馬追の虫

早川のたぎちの音をひもすがら身近かには聞きて越ゆる比良山

山崩(なぎ) あとの赤壇山に陽は照りて見るにひもじき真昼なりけり (山原 二五二三)

秋 去 春 来

道のべに咲きてたわめる百日紅風かもあれや花をこぼしつ

ねがへりの目覚めわびしもさむさむと枕べにして鳴ける馬追

菱の花咲きてをあればこの沼のわづかに明(あか)し草生ごもりに

吹く風はいたもはげしみ小鳥らのとまりかねたる声あげてゐる

山の国は冬日わびしもおりおりを時雨おとして行く雲のあり

山城の国原寒き夕まぐれ風に晴れたる山のはるけさ (山原 二九二四)

以上で「京都在住時代―その一―」はおわる。

十二月二十六日、同僚の岩見護と雲母(きらら)坂より比叡山に登り、横川(よかわ)に行く。その時の感興から生れた歌は「京都在住時代―その二―」に収める。

岩見先生の遺歌集『細流抄』(一九六〇年・岩見宏刊行)のあとがきに令息宏氏は次のように言っておられる。

大正の末から昭和十七年まで京都三中に職を奉じてゐたが、そこでも二三の歌友といふべき人があつた。中でも故大塚五郎氏には、作品について意見を求めるやうなこともあつたらしい。

春夢女史の文と南子の歌 (三)

1990 9 30 原 田 憲 雄

四、南条貞子の和歌

中野道遥が「南子」などと呼んだ南条貞子の和歌が、佐々木信綱編著の『千代田歌集・第三編』に選ばれていることは本稿の初めに触れた。まずその作品を列挙し、ついで歌集についての説明などに進みたい。部立てや題は信綱の定めた通り。題上の数字は、貞子の歌の一連番号でわたしが与えた。和歌の下の数字は、頁数である。

新年部

〇一 新年鶴 葦たつの千代をことほく声の中に朝日のほりて年立ちにけり 南条貞子 東京 〇〇三

春部

〇二 残 雪 東路は朝日のかにかすめともなほ雪しろしこしの山みち (以下姓名住所省略) 〇一九

〇三 若 草 しら雪のきゆるまにまにもえ出てやや色めきぬ野への若草 〇二五

〇四 水郷春望 見わたしの波路はるかにこき出てかすみをとる蟹の釣舟 〇三四

〇五 春 駒 霞たつ富士の裾野のはなれ駒いはゆる声ものとかなりけり 〇三五

〇六 雨中雉子 椿ちるかた山かけにほろほろと雨ふりいてて雉子鳴くなり 〇四〇

〇七 遅 日 花見つつ野ゆき山ゆきたとれとも猶たかきかな春の日の影 〇四一

〇八 松間落花 ききすなく片山さくらほろほろと松を残して花ちりにけり 〇六三

〇九 若 鮎 さきにほふ吉野の川にかけとめてこ鮎とふなり花のした蔭 〇六四

一〇 杜 若 ふかき江の水のみとりをむらさきに咲てへたつる杜若かな
〇七〇

一一 暮春月 花鳥のいろねも今朝はむなしくてほのかに霞むあり明の月
〇七四

夏 部

一二 首夏朝 夏来れと雲ゐに春やのこるらんかすみていつる朝日影かな
〇八三

一三 首夏月 夏きぬとおもひなしにや三日月の影も涼しく見え渡るらん
〇八四

一四 新樹風 わか葉さす庭のかへるて露ちりて袂にかろくあさ風そふく
〇九四

一五 終夜待鷗 郭公まつ夜なからにあげにけり雲ゐの月もほのかなりしを
〇九九

一六 海辺時鳥 おきとほく漕き出てみれはいそ山のまつ原かくれなく郭公
一〇四

一七 海辺梅雨 藻塩やくけふりもたえて須磨の浦のうらわ寂しき梅雨の頃
一一一

一八 晩水鶏 有明の影うすれゆくあけかたにせせらぎ近く水鶏なくなり
一一三

一九 螢 草の葉の露とみたれてふたつ三つ螢こほるる川つらのみち
一二七

二〇 夏月易明 てる月の影もひかりも涼しきをさも心なきみしか夜のそら
一三三

二一 夏草滋 ともなひしわらはの影の見えぬまで夏草たかし岡こえの道
一三四

二二 風前蓮 蓮葉の露ふきこほす夕風にいととすすきいけのおもかな
一三七

二三 昼 顔 草も木もしをれかちなる日さかりにひとり匂ふか昼顔の花
一三八

二四 朝 蝉 よひの間の名残ととめて朝庭になく音しくるる蝉の声かな
一三三

- 二五 船中納涼 かくはかり袖冷かにおほゆるは秋をも乗せし舟にや有らん 一三九
- 二六 松下待風 かやり火の烟いふせみ夕風をまちつつすむまつの下かけ 一四〇
- 二七 晩 夏 あきつ飛ぶ野川の流水かれて雨まつほとになつそくれゆく 一四二
- 二八 夏 夜 かよひ来る篋の水の音すみてはしる涼しきなつの夜はかな 一四三
- 二九 夏 瀧 夏なから衣手さむしここにのみ秋やたちけんぬのひきの瀧 一四四
- 三〇 夏田家 蚊遣火のけふりいふせみ夕月の影ほのくらし小山田のさと 一四五

秋 部

- 三一 早 涼 いつしかも身にしむはかりなりにけり昨日は待し庭の夕風 一五五
- 三二 萩 さきつつく野への錦にまさりけりまかきのもとの萩の初花 一五六
- 三三 野 萩 見たたひにうらやまれけり宮城野の野守の庵の秋はきの花 一五九
- 三四 草花盛 八千くさの花の数々さきみちて踏わけかたき秋の野へかな 一六〇
- 三五 深夜雁 すきまもる夜風をさむみ見出せば更ゆく月に雁は来にけり 一六一
- 三六 旅中聞雁 こえわふる夕山おろし寒けきに衣かりかねなきわたるなり 一七一
- 三七 月前鹿 見たたしの山の端遠く霧はれてすみゆく月にをしか鳴なり 一七二
- 三八 秋風寒 あき風は身にしむはかりなりにけり衣かりかね鳴渡りつつ 一七九
- 三九 雨後月 はせを葉にそそぎし雨の音たえて月すみわたる庭の面かな 一八九

四〇 海辺月

うちむれて貝ひろふ子の見ゆるかな夕月清き磯のひかたに

一九五

四一 紅葉浅

よひのまの時雨やそめしもみち葉の梢わつかに色付にけり

二〇八

四二 暮 秋

あかすみし籬の菊も移ろひてそのふさひしく秋ふけにけり

二二三

四三 秋 野

不二の嶺は尾花か末にいりはてて夕暮さひしむさし野の原

二二七

四四 秋 市

秋ふかき立田の市路風ふけはもみちも人にたちまじりつつ

二三九

冬 部

四五 初冬菊

さきのこる籬の菊の花のうへにおく霜見えて冬はきにけり

二二三

四六 庭残菊

霜かれの小草ましりに匂ふらん菊の香おくる庭のゆふかぜ

二二三

四七 深夜水鳥

さよふけて群れるる鴨を騒ぐなる浮寝の床も今こほるらん

二四三

四八 惜歳暮

おほかたの心に春をまちなからさすかにをしき年の暮かな

二六八

四九 除 夜

いかにせん野寺の鐘の音もはや年の一夜をつけわたるかな

二七〇

雑 部

五〇 暁

鶏の音におとろかされて見あくれば雲間に高し有あけの月

三〇八

五一 夕

雨雲はあとなくはれし大空に星見えそめて日はくれにけり

三〇八

五二 井

年経てもにこりたにせぬ山の井の水の心をこころともかな

三三五

五三 水

かくれかの門のいさら井浅けれと独くむには事たりにけり

三三五

五四 山家朝 うちわたす嶺を朝日はいてなから影なほくらし山もとの里

三三

五五 苔 天つ日の光もうとき山かけは石にも木にもこけむしにけり

三五

物名沓冠廻文題部

五六 ふてすみ すすみゆく年の始に少女子のきそふてまりの音の長閑けさ

四〇二

以上である。前稿で、『千代田歌集』に選ばれた貞子の歌数を五十二首としたが、このたびの調べで五十六首であることがわかった。訂正しておく。

五、『千代田歌集』

『千代田歌集・第一編』は佐々木弘綱を撰者として一八九〇年一月、東京の博文館から出版された。同館はその年の十月、弘綱・信綱父子校註の『日本歌学全書』第一編を刊行し、十二月にその第二編と『千代田歌集・第二編』を出したが、弘綱は発病し、翌年六月死去する。しかし『日本歌学全書』はその年の十二月までに第十二編を出し完結している。『千代田歌集』は、おそらく、『日本歌学全書』の読者層拡大を視野においた副次的計画で、評判が良かったため第三編以下も続けることとし、原稿を集め始めていたのである。そこへ撰者の死という予想せぬ事態が発生した。弘綱が死んでも『日本歌学全書』は予約通り出版しなければならぬ。これは信綱が処理し、『千代田歌集・第三編』の発行は後回しにしていたが、『日本歌学全書』が終了した段階で、詠草を追加公募し、その「撰者」の役割を信綱に廻したのである。一八九三年七月になって刊行された。

第一、二編は見えていないが、体裁は第三編とほぼ同じであったろう。以下、第三編について記す。

大きさは一八×一三センチ、本文四百十頁。表紙には「□□文芸全書第廿二編 佐々木信綱撰 千代田歌集 第三編」とする。□□は、架蔵の本にラベルが貼ってあって読めないものである。扉には、上のように記し、次

従二位伯爵東久世通禮公題詠

従三位男爵千外家尊福公題詠

佐々木信綱撰

千代田歌集 第三編

編

東京 博文館 蔵版

君臣のたたしき道をあふくかな先あらたまの年のはしめに

あまの原いつる朝日も長閑にて御代ゆたかなる年立ちにけり

今朝見れば富士のみ雪も新玉の年と共にそ積みかさねける

新玉の年わか松のみとりにもおいせぬ千代の色は見えつつ

あたらしき年の始のよろこひは老も若きもかはらさりけり

ほのほのと明放れゆく大空のはれのおものや今ささくらん

歳たてる今日としいへは大君の千代を謡はぬ人なかりけり

ももしきの大内山の雪のうち梅もにほひて年たちけり

熾仁 親王 東京

小松宮頼子 同

三条 実美 同

近衛 忠熙 同

東久世通禮 同

高崎 正風 同

岩下 方平 同

室町 清子 同

の二枚に、東久世と千家の墨書題詠を掲げ、その次から本文の頁となり、まえがきも凡例もなく、「千代田歌集三篇上巻 佐々木信綱」として「新年部」が始まる。上巻は「冬部」までで、「恋部」以下が下巻である。「新年」の題で一頁に出ているのは、

すべて皇族・貴族である。一般からも詠草を募集したのではあろうが、その「一般」は、紳士録に掲載される高級官僮や財閥とその家族のなかから編集部であらかじめ選定交渉した人たちであつたらう。後書に、

この三編を撰ばんの心はかねてよりありながら日々何くれの事ども繁くてたゆたひぬしかどこたび思ひおこしていとみに撰び終へしなれば歌のもれたる題の漏れたる共にいと多からんはた父の撰びし初編二編にひとしき歌もあらむ見ん人その心してよ……

今年の春詠草をおくられし人々の歌おほかたは載せつれど猶漏れたる人もあらんそはすべて四編に載すべし四編は今年のうちに出すべければ諸国の歌人たち次にかかぐるおきてによりてとく詠草をおくりてよ

千代田集料詠草投寄規定

……歌数は二百首以下五十首以上とす歌数すくなき時は撰にもる事あればなり……詠草をおこせらるるは本年九月三十日を限とす……明治廿六年七月十三日 佐々木信綱

そして、この本の奥付には「明治廿六年七月十五日」すなわち後書の日付の二日後が「印刷発行」の日となつていて、いかに匆卒につくられた本であるかが伺われる。ついでに記せば、この年すなわち一八九三年には『千代田歌集・第四編』は出ず、翌年二月に、佐々木信綱『新撰明治歌集第一編』が出ている。『千代田歌集・第四編』となるべきものを新装改題したのであろう。ここで信綱について簡単に説明しておこう。

佐々木信綱(一八七二—一九三三)、三重県鈴鹿郡石薬師村に、国学者佐々木弘綱の長男として生れ、十歳のとき父に伴われて上京し、高崎正風の門に入り和歌を学び、十二歳で東京大学古典科に入学、十六歳で卒業。一八九〇年、十

八歳から父と共に『日本歌学全書』を編集校訂し、歌作では旧派和歌の伝統をうけつぎながら新派短歌に発展し、地味ながら日本文学の創作と研究に深く広い足跡を残す。中野逍遙とは一八八九年ごろから親しくなったらしい。さて、わたしはまず、『千代田歌集・第三編』の一〇〇頁のすべての作品をリストにあげ、なかで十首以上選ばれている人と、この稿で参考になりそうな人のなかから十七人を引き出し、そのすべての歌数を調べたところ、次のような結果であった。歌数、氏名、生卒年、社会的地位などの順に記す。

- 六七 近衛 忠熙 このえ・ただひろ (一八八一—一九〇六) 堂上華族の長老。
- 四九 東久世通禧 ひがしくぜ・みちとみ (一八三三—一九一三) 枢密院副議長。
- 一三 千家 尊福 せんけ・たかとみ (一八四一—一九一八) 神道大社教管長、貴族院議員。
- 四〇 八田 知紀 はちだ・ともり (一八五九—一九三三) 香川景樹に学んだ歌人。
- 五八 高崎 正風 たかさき・まさかぜ (一八三六—一九一三) 八田知紀に学んだ歌人。御歌所長。
- 六〇 黒田 清綱 くらだ・きよつな (一八三〇—一九一七) 元老院議員。八田知紀に学んだ歌人。
- 四〇 小出 繁 こいで・つばら (一八三三—一九〇八) 御歌所主事。
- 八六 税所 敦子 さいしよ・あつこ (一八四四—一九一九) 皇后・皇太后の侍女で文学を担当した。
- 一四 下田 歌子 しもだ・うたこ (一八五九—一九三六) 華族女学校の創設に参与し、のち実践女学校を開く。
- 六〇 佐々木弘綱 ささき・ひろつな (一八六一—一九一九) 竹柏園をひらいて、国学の研究、和歌の教育に勤めた。
- 二九 〃 信綱 〃 のぶつな (一八七二—一九三三)

一一 大塚楠緒子 おおつか・くすおこ (一八七一年—一九〇〇) 法曹界の高官大塚正男の長女で佐々木弘綱に和歌を学び、小説・美文を発表。のち美学者の大塚保治と結婚。

七 田辺 竜子 たなべ・たつこ (一八六一—一九〇三) 元老院議員田辺太一(蓮舟)の長女でのち評論家の三宅雪嶺と結婚。和歌を桂園派の中島歌子に学び樋口一葉と同門で、花圃と号し、小説・随筆の作がある。

四二 富田 愛子 とみた・あいこ と読むのであろう。中野逍遙の従妹。和歌は佐々木信綱に学ぶ。

四 伊達 宗城 だて・むねき (一八七三—) 旧伊予宇和島藩主。大蔵卿、修史館副総裁など。

一一 小田垣蓮月 大田垣蓮月(おおたがき・れんげつ) (一八七一—一八五五) のことであらう。幕末の京都の女歌人。

三 上田 秋成 うへだ・あきなり (一七四一—一八〇九) 江戸中期の国学者、読本作者。

近衛・東久世・千家は古今・新古今以来の堂上和歌の伝統を保持する人、八田・高崎・黒田は幕末・明治初に天下に風靡した桂園派の大家、当時の御歌所はこの二つの流派によって占められていたようだ。そうして、一八九八年、正岡子規が「歌よみに与ふる書」を発表するまでは、ほとんどすべての人が、このようなものが日本の歌であると考えていた。だからここでも、小出繁以下のひとも同じ歌風で、名前を除けばだれのうたもほとんど見分けがつかないほど型にはまったものである。

ところで、『千代田歌集』は明治の詞華集で、作者もほとんど明治人であるのに、そこに、明治に足をかけた人とはいえほつんと大田垣蓮月が入り、香川景樹より古い上田秋成をいれているのはどういうことだろう。

信綱がいうように、送られた詠草のほとんどすべてを採用したのだとすれば、掲載の歌数によって、軽重する

ことに意味はないが、選択の過程を吟味せずに結果について評判するのが、この種の詞華集に対する世間というものであろう。さきにいったように、南条貞子の作品は五十六首も選ばれていた。税所敦子は男女を問わず最も多いが、女性としては貞子はほとんど税所に次ぎ、天皇から名をもらった下田歌子や、この表には出ていないが二首しかえらばれていない中島歌子を凌ぎ、歌数だけでいえば女流の大家ということになる。もっとも富田愛子もまた四十二首選ばれ、南条貞子には劣るものの、他の女性をはるかに抜く。同じ竹柏園の弟子の大塚楠緒子が十二首しかえらばれていないことを思うと、奇異な感じがする。その理由の考察に興味がないではないが、ここでは、この集での南条貞子の位置が、中野逍遙の彼女に対する恋慕に油をそそぐものであったろうことを指摘しておけば事はたりる。

南条貞子は、上州（いまの群馬県）館林の実業家南条新六郎の長女で、二十歳前後に東京に出、佐々木信綱と同じ神田小川町一番地に住み、逍遙の従妹の富田愛子とは、お茶の水の女子高等師範学校の同級で、ともに信綱の弟子として和歌を学び、逍遙とも知りあったらしい。岡山県生れの弁護士三宅碩夫と結婚したのは一八九四年、数え年二十四のときだという。それなら一八七一年生れで、逍遙より四歳わか、信綱に一歳長じ、春夢・坪井すむより二歳うえである。箕輪武雄氏は「中野逍遙論」で、『大正過去帳』の三宅碩夫の死亡記事により、貞子は「明治二十四年の春には結婚していたはず」とされる。明治二十四年は一八九一年、その二年後の七月に、貞子の師の佐々木信綱が編集した『千代田歌集・第三編』に、「南条」の苗字で出ているところから察して、彼女の結婚はその後であり、通説のごとく一八九四年三月と見るのが穏やかではないか。

「ごめん、忙しいめをさしました。しんどかったやろ、疲れたのところがうか、ほんまにすんませんでした」と千代さんが玄関に入ってきたきそうな気がする。

どうも千代さんの様子がおかしい、いくら電話をしても出られないが、あなたは知りませんか、と千代さんが生け花を習っていたT先生から電話がかかってきた。あちらこちらにたずねてみたが、消息がつかめない。わたしは千代さんの家に行ってみることにした。着いたのは午後三時を少し過ぎた頃だった。隣の家の人にたずねてみたが知らないという。何かあったら電話してくれと言っているのですがおられませんか、と首を傾げる。脚立を借りて窓からのぞいてみたが何も見えない。郵便受けに新聞がたまっている。わたしは内側から鍵のかかった玄関の戸をドンドンたたいて呼んだ。T先生も来られ、千代さんの妹さんに連絡して、やっと戸が開いたのは六時頃、あたりが暗くなりはじめていた。千代さんは玄関の次の板の間に倒れて独りで亡くなっていた。

五十八歳で乳ガンの手術をし、ことし六十三歳までの五年間、病氣とたたかった。自分の病氣はよく知っていたが、決してあきらめない人だから、最後まで「負けへん、負けられへん」と言った。しかし「誰でもいっぺんは死ぬんやさかい、寿命が尽きたらしようがないやんか、どれだけ生きられるかわからへんけど、生きられる間は頑張らんと」とも言った。

五年の間にヨーロッパへ行き、国内旅行もたくさんした。生け花、書道、社交ダンスを習い、T先生と一緒に

老人大學へも通った。病氣の人を見舞い、若い人の結婚の世話もした。ダンスパーティーというものをわたしに見せてくれたのは千代さんだった。甥や姪にはよく心を使った。発病するまで、約四十年のあいだ、小学校の教師を勤め、身体や心を病む子ども達のためには殊に努力を惜しまず走りまわった。わたしが同じ学校で仕事をしたのはその中の三年、わたしにとっては勤務することの最後の時期だった。そのとき一緒だった人達が五人ほど集って、食事をしたり、日帰りの旅行や観劇をした。千代さんの病氣が進んで、一昨年肝臓に転移している、遊ぶこともだんだん少なくなったが、時々妙徳寺に集まって千代さんを励ました。みごとにケーキを買ってくる人や、美しいプレゼントを配る人、大きな西瓜を持ってくる人などそれぞれに心遣いをし、千代さんもヨーロッパ土産をもってきたり、おもしろいプレゼントを考えたりして楽しませてくれた。

彼女が病院に入って肝臓の手術をすると、みんなはまだ現役なので時間がとれず、わたしは週に一度くらい自転車で行った。妹さんが世話していた。寒くなり始めた頃で、ある風の強い日に、御所の砂利の上を走って行くと、松ぼっくりがたくさん落ちていた。形のよいのを何個か拾い、ポケットに入れて持っていた。ゆうべは風が強かったからと言ってそれを千代さんに渡すと、彼女は笑ってベッドの枕もとに並べた。そのときの残りの二個は、いまでもわたしの机のよこの棚に置いてある。帰りには御所のみみじが光を透して美しかった。

入院中に薬の副作用で髪がたくさん抜けたことがあった。いちど洗髪を頼まれて、ていねいに洗ってあげると手にいっぱい髪が抜けて、わたしはどうしようかと思ったが、千代さんは知っていて、「ごめんな、気持ちが悪いやろ、髪がどんどん抜けるんえ、枕にも毎日いっぱいつくの」と言った。からだをふいて、足を洗っていると

突然に彼女が声をあげて泣いたので、わたしは慌ててしまった。

すこしよくなった頃、千代さんは以前に乳ガンを手術した病院へ移された。だんだんよくなって、時々、散歩のついでに自分の家へ帰って、すこし掃除をしてきたなどと言ひ、同室の人の世話をし、歩けなくなっていた人の手を引いて練習させ、外へ連れ出して運動させるようなことまでしていた。その人は、おかげで歩けるようになり、千代さんよりすこし遅れて退院したが、その後も洋裁を教えるということで千代さんを自宅に招いているようだった。

退院した千代さんは、間もなく、真っ白な髪がふさふさと生え、その回復ぶりに驚かされた。これが、わたしにも彼女自身にも、彼女の病気が大変によくなっているような錯覚をおこさせていた。しかし以前より病院へゆく回数が増えていたと思う。それでも熱心に生け花や書道その他を習ひ、病氣の先輩や、同じ病氣の知り合いを見舞ひ、近所のお年寄りを励まし、頼まれると若い人の結婚話にも力を貸した。

火曜日は、洋裁に行き、ついで生け花を習ったので、翌日にその花を持ってわたしの家に来て、習ったとおりに教えてくれるのだった。すっかりメモをしておいて、小学生に言うように教えてくれ、しかも決して「教える」という態度はなく、わたしの生けたのをいつも褒めてくれたから、こんなにいい先生はなかった。生け上がった花を床の間に置いて、二人で眺めて「いいですね、ほんとうにきれいですね」と花たちを褒め、彼女は、またすこし手を入れたりして花の姿を楽しんだ。昨年暮れに、一月は花は休みだからと、正月用の松を持ってきてもらったが、その後、正月はずっと彼女は元氣に出歩いているものと思っていた。一月の末の日に千代さんから電

話があり、二月も花は休みだという。それはよいが、声がすこしおかしい。ほんとうに元気なのですか、とたずねると、実は、暮れから入院していた。これからまたどの病院へ変わる途中なのだというのでびっくりしてしまったが、もうよくなったから、病院へは来なくていい、じきに退院できるから、と彼女は言った。しばらくひかえていたが、そつとのぞきに行ってみると、思ったより元気だった。帰っても食事を作ってくれる人もないから、ゆっくり養生してから帰ると言い、本を熱心に読んでいた。そして今年の三月十三日に退院した。

彼女の激しいガンとの闘いが始まったのはその後だった。週に一度だった通院が、二度になり、三度になり、やがて入院を勧められるようになったが、彼女はきちんと通院し、ふたたび入院してベッドで生活することを承知しなかった。わたしにはその治療がどういふものかわからないが、採血して、それを何か処理した後、二日ほどして身体に戻すということをする。また腹部に機械が埋めこんであって、そこへ注射をするが、それが大変で、うまくゆかないと下着まで血がにじむのだそうである。その注射は発熱するので、帰って夕食をすませ、こたつと厚い布団を用意し、湯ざましを枕もとに置く。着替えの寝間着を積んでやすむ。初めは氷の中にいるように冷たくて、こたつを抱いて布団をかぶり、歯も合わないほどガチガチふるえている。それを通り越すと、爆発しそうに暑くなり、汗が吹き出す。布団をはねのけ「苦しい」とうなっているのだという。湯ざましを飲み、寝間着をきかえてすこし落ちつく頃に夜が明けはじめる。その治療の回数が増え、疲れがひどく、食べ物も吐いてしまふことが多くなった。それでも彼女は週に一度、四月から入学した老人大學に通い続けていた。花を生ける元気はなかったが、先生の家まで花をもらいに行き、わたしのところへ届けてくれる。「あんだ、もう上手に生ける

やろ、きれいに生けて」といって花を置いて帰っていった。お花はもういいから、やめて、ゆっくり休んでくれるように頼んだが、老人大學とお花だけはどうしても行く、行かんなんらんと思うと不思議と元気が出て起きられるが、それがなかったら自分はもう起き上がれないだろうという。

八月はお花が休みで、わたしも盆の行事などで忙しくて彼女の顔を見ることがなかった。電話では、かなり苦しそうな声で十キログラム以上痩せたといっていたが、それでも老人大學には行っているという。

九月にはいって、五日ごろに久しぶりに花をもって訪ねてくれた。ひどく痩せて、頸が細くなっている。それからまた二回くらい持ってきてもらっただろうか。無理をしないで、やめてほしい、と頼んだが、「あんたにあげるのところが、仏さんにあげるのやし気にせん」と言った。

九月二十八日、「下痢がひどかったので、お花をもらいに行けなかったが、ナシを一箱買ったので、これから自動車でもらいに言って、あんたのところへ行く」と電話がかかり、夕方近くに、ナシを持ってきてくれた。

「ああしんど、タクシーで来た。自動車を運転してナシをもらいに行ってきたけど、ガレージに入れるのに難儀した。やっと入れたと思ったら、隣の車のドアが開かへんし、もういっぺん入れ直して、もうしんどうて、これはあかんと思ったし、タクシーで来たわ」

「そんな無理せんでもナシは配達してもろうたらいいのに、なんでそんなに頑張ったの」

「持って行ってあげるって言わはったけど、わたし運転しなかったんや。行ったらお店の人びっくりしてはったわ。ようそんなんで来られましたねえ言うて、箱を積んでくれはった」

「とにかく上がって、きょうは娘もいるし、みんなで雑炊を食べようと思って、たくさん炊いたんよ、さあ上がって」

めずらしく彼女は、そんならあつかましいけど御馳走になろうか、と言った。

うちには慣れているので、まず主人の書斎へあいさつに行き、トイレに行くという。なかなかこちらに戻ってこないで、どこへ行ったのかと思ったら、暗い玄関の間にきちんと正座してわたしの呼ぶのを待っていた。侍みたいなひとだとびくりした。こっちこちと、引っ張るようにして居間に座ってもらい、大きな土鍋を据えて、みんなで輪になった。千代さんが来たときは、たいてい主人とわたしと三人で食べるのだが、この日はめずらしく娘が居て、四人で長い時間をかけて食事をした。千代さんのお母さんにまつわる思い出の話などが出た。

彼女は、女学校を出てすぐ代用教員になった。勤めながら大学の夜間の教育学部へ行き、カウンセリングの勉強をした。その間、お母さんがドイツ語の辞典を引くのを助けてくれたり、卒業論文を読んで間違いをチェックしてくれた。「母のおかげで卒業できたようなものです」と言った。カウンセリングの先生は主人も知っている方だったので、よく話を通じたようだった。

「いい本をたくさん買っていて持ってるんですよ。あれをみんな読んだら賢くなるんやけど、飾ったの」という。その言い方が面白かったので、わたし達は笑い出してしまった。

「そうなんよ、だからむかしのわたしとおなじ。みんな読んだら賢くなるんやけど、飾ったの」と言っていて、みんなアハアハと笑い続けた。

「だいぶ足がふらついてはるさかい、あんた家まで送って行きなさい」

と主人がそっとわたしに言った。わたしはそのつもりで、千代さんについて家を出たが、バスの停留所まで行く、大丈夫だと断わるので、あまり無理にいうのも悪いと思って、バスに乗った彼女を見送って別れた。

十月三日の夕方、どうしても下痢が止まらないので外へ出られないからお花を持って行かない、と千代さんから電話がかかってきた。四日、わたしは、お粥をもってゆくから玄関の鍵を開けておいてくれるように電話して、タクシーで行った。千代さんは玄関の中の上り口に座り、柱にもたれて目を閉じていた。首は手で握れるかと思うほどに細かった。わたしは思わず彼女の両肩をつかんだ。

「大丈夫なの、食べんとあかんよ、何も食べてないのに下痢ばかりしていたら弱るさかい、枕もとにお鍋ごと置いてでも、ひと匙ずつゆっくり食べるのよ、また明日持ってくるさかい、お鍋は交換するから心配せんでもいしね」

「うん、そうする」

「明日は病院へ行く日やね、何時ごろ行くの」

「夕方」

「それなら早いめに持ってくるわ」

「いいわ、こんなにたくさん食べられへん」

「そう、それならあさってにする」

「おおきに」

「何か用事があったら呼んでね、すぐ来るさかい。入り口はこの玄関しかないって言うてたね、非常口は閉じてしもたんやろ、来てもここが閉まってたら入れへんやんか」

「そうや」

「困るな、どこか入れる所があるといいのに」

彼女はちょっと笑ったようだった。とにかくわたしが帰らないと、千代さんは休めないで仕方なく外へ出た。見ているから戸の鍵をかけてと言って、外からのぞいていると、彼女はあがり口の戸につかまってやっと立ち上がり、下へ降りて鍵をかけ、わたしに、指で輪を作ってオーケーという合図をした。わたしも外から、早く中へ入ってという手真似をすると、うなづいて彼女は中に入り、あがり口の戸を閉めた。

その翌日、彼女の家で電話をしたが出なかった。六日にも何度も電話をした。出ないので、病院に電話をしてみると、昨晩は病院に泊まれて、けさ早くかえられました、という。また彼女の家で電話をした。ベルが四十回鳴るのを数えたが出なかった。

夕食の支度をしていると、千代さんから電話がかかってきた。どうしていたのかとたずねると、病院では一睡もできなかったので頭が痛くて、帰りにいつもの耳鼻科に行ったが、いっぱいの人だった。家に帰ったが、学校の運動会の練習や、近所の音がやかましいので、布団をかぶっていたから、電話のベルは聞こえなかったというのだった。もうしんどいからお花をやめようと思うと言うので、わたしはそれがいいと賛成した。

「そうか、それでいいか、ほなそうするわ。あんたもう電話せんでもいい、何か用事があったらこっちからするさかい、もうあんたの方から電話せんでもいい」

「そう、したら電話はせえへんけど、お粥を持って行くわ」

「いいわ、まだこの間のが冷蔵庫に残ってるさかい」

その翌日の朝、千代さんは、お花の丁先生の所へ、おけいこをやめるからという断りの電話をしたそうである。八日には病院へ行くはずになっていた。わたしは八日には父の十七回忌のための掃除に里に帰り、九日に準備し、十日に法事をすませ、夜、家に帰ると、丁先生から電話があり、八日に千代さんは病院へ行っていないらしい、どうも変だ、というのであった。その日は遅かったので、十一日に、わたし達が彼女の家へ行ったのである。検死の結果、千代さんは八日に亡くなっていた。

わたしといっしょに千代さんとつきあってくれた主人は、千代さんの妹さんに葬儀を頼まれるとすぐ引き受けた。その夜、千代さんの棺は妙徳寺に安置され、親しかったわたし達の仲間が二人、夜おそく駆けつけて、妹さんとその友人と、五人でお通夜をした。法名は青蓮院妙覚大姉である。やがて姪夫婦もやってきた。

翌十二日、生前にごく親しかった人達が集まって、雨もようのなかを、静かな葬儀が行なわれた。千代さんの霊柩車が動き出したとき、わたしは「千代さんありがとう、ほんとうにありがとう」と合掌した。車が見えなくなった後すぐに雨がはげしく降りだして、葬儀のためのテントや幕がたちまちのうちに取りはずされ、花が運び出されると、本堂は何事もなかったようにもとの静けさにもどった。人の死というものはなんど出会っても、あ

まりにもあつげなく、魔法をかけられたように、どう考えてもつかまえようのない不思議な出来事である。これはいったいどういふことだろうと考えているうちに、時がたつて行く。

ただ、千代さんの死は、わたしに、死というものの形を、以前よりずっとはっきりさせてくれた。彼女が「もう電話をせんでもいい」と言ったのは、言葉でどんなに言ってみても、わたしが千代さんの死に代ってあげることはできないし、たとえ可能であっても、わたしにそれほどの勇氣はないから、死は自分のものでしかないということを言いたかったのかもしれない。どんなに苦しかっただろう。たった一人で耐えた最後の六カ月はどんなに恐ろしかっただろう。それは想像に余りがある。亡くなったときには、これでやっと千代さんの闘いが終わったというような気持ちさえた。

千代さんの遺骨は妹さんが守っておられるが、三十五日がすんでから、石川県の御両親のお墓に納められるそうである。毎年、お盆には、自分の自動車にお供えや供養の品を積んで石川県まで行き、お寺で法要を営んで、墓参するのが、千代さんの夏休みの仕事だった。一昨年までは自動車で行っていたのが、昨年は、運転するのが無理だからと、妹さんと電車で行った。今年は行けなくて、親戚の人に頼んだと言っていた。

すこしでも人の役にたちたいと、一生懸命に生きた千代さんだった。最後までいのちを完全に生き切ったという気がする。わたしにとって、千代さんの死は、痛いほどしつかりと、ひとつの命の在り様を、胸に刻みつけてくれるものだった。もう何も言うことはない。ただ手を合わせるばかりである。千代さん、ありがと。ほんとうにありがと。